

苦労があつておいしい

平尾小・5 村松 扶有己

「おいしい。もちもち。」

まわりの友達がうれしそうな顔をして、おもちを食べていました。わたしは、周りの反応を見て、ゆっくりおもちを一口食べてみました。

「おいしい。」

とわたしもつぶやいてしまいました。そして友達に、

「もちもちだね。」

と言いました。自分で作ったおもちだから、さらにおいしく感じるのかなと思いました。

わたしたち五年生は、お米を育てるために、春からしろかきをしました。しろかきとは、よいお米を作るために、土を耕す作業です。

田んぼには、去年のいねの根っこがたくさん残っていて、ときどき、

「いたい。」

と思うときがありました。わたしは田んぼがどろどろだったので、しろかきは好きではありませんでした。どろどろになったので、田んぼから出たあとも大変で、足のどろが固まっついて、水で洗い流してもどろがなかなか取れませんでした。

その後、社会の授業でカントリーエレベーターの見学に行きました。しゅうかくし終わったお米が、どんなふうになるのか教えてもらいました。でも、まだこの時は、お米がどのようにできるのか、

想像できませんでした。

田植えの時期になりました、水を張った田んぼに入りました。足がどろの中に入らず入っていききました。ペアの二年生が、

「足がぬけなくなつたあ。」

ときけびました。わたしは手を出して、助けてあげました。そして、無事田植えをすることができました。

わたしはその後、田んぼのことをすっかりわすれていました。秋になって、お米のしゅうかくの時期になりました。久しぶりに田んぼに行ってみると、いねのせがのびて、黄金色になっていました。ほ先にはお米が実っていました。わたしは春の時とは大ちがいだなと思えました。いねかりはとても大変でした。なぜかという、二年生があぶない使い方がかまを使わないように見ると、二年生がかつたいねをしばることが大変だったからです。

わたしはこのいねからどうやって白米にするのだろうかと思えました。そのぎ間は、だっこくや精米で分かりました。

だっこくや精米は、五年生だけでやりました。だっこくは、だっこく機でやりました。もみながら機械から飛び散っていました。精米では、茶色だったお米が白くなって出てきました。これがいつも見ているお米だと思えました。このお米になるまでに、たくさんの時間がかかり、手間もかかっているとわかりました。きっとわたしの知らないところでお世話をしてくれた人がいると思います。

お米の勉強をして、わたしはこれからも、一つぶ残らずお米をおいしく食べたいと思います。

